

# 越中八尾おわら歌碑 《いにしへの文化人との交流》

元八尾総合行政センター前(17/26)



八尾よいとこ おわらの本場

二百十日を

オワラ出て踊る

渡辺紫洋

渡辺紫洋(わたなべ しよう)

紫洋は号。本名は常太郎つねたろう。

大正末期から昭和初期にかけて旧八尾町役場の助役を務めた。八尾町諏訪町生まれ。一九二〇年(大正九年)に「おわら研究会(現在の富山県民謡越中八尾おわら保存会)」を組織し中心的な活躍をした。町長に橋爪秀太郎、助役の渡辺常太郎、中村安二郎、吉友羽寿等の人名が残っている。

渡辺は、おわらの作詞と普及の他、町長らと共に「駅が遠ければ町の衰退を招く」と危機感を抱き、鉄道省へ何度も足を運び、中心部に近い現在の「福島」への駅位置変更を認めさせた(現在の元高山本線越中八尾駅)。この決断が、現在の八尾の交通の利便性を守ることとなった。

元図書館八尾福島分館前(18/26)



誰に思いの紫染めた

五月八尾の

オワラ桐の花

佐藤惣之助

佐藤惣之助(さとう そうのすけ)

Vol.1に掲載



※人物の説明は主におわら保存会資料より抜粋

## 井田の川波

雪解けの早瀬  
流す浮名も

オワラ春だより

小川千甕

小川千甕(おがわせんよう)

Vol.2に掲載



## 【補足】井田川は八尾の人の心の景色

雪解けの水が流れる井田川は今も八尾の人の心の景色である。

八尾人が残した書物には、八尾の南に奥深く広がる山々に言及したものが少なくない。その底流には、当時の町の経済の成り立ちがあるとと思われる。

飛騨や国境の山村から多くの物資が八尾へ運ばれ、そこに市が立ち、人が集まってできた八尾町。井田川の下流では富山平野から荷を運ぶ川船が往来した。町に豊かさを与えてくれる自然に対する畏怖や感謝、尊崇の念が自ずと生じていた。

一九二七(昭和2)年、念願の高山線が開通して八尾駅が開業し、人や物の流通は量もスピードも大きく変わった。

それに伴い、おわらは、保存会が中心となりその認知度を高め、八尾町の振興に寄与することを使命の一つとして担うことになったのである。



